

理解度&釣れる度100%



マルキュー

優良 餌本



エサからパワー



Contents

- 02 ウドン系くわせエサの使いこなし
- 04 ウドンセットの浅ダナ釣り
- 08 ウドンセットの沖宙釣り
- 12 ウドンセットのチョーチン釣り
- 18 段差の底釣り
- 22 両グルテンの沖宙釣り
- 26 バランスの底釣り (両グルテン&グルテンセット)
- 32 グルテンセットのチョーチン釣り

2022 春号 冬号

HERA BAIT POWER BOOK

「カ玉」や「カ玉大粒」は「さなぎ粉」漬けにするのが主流。



「カ玉」 「カ玉大粒」



瓶詰め状態で購入でき、そのままハリに付けて使える便利なくわせエサ。エサ持ちをよくするために「さなぎ粉」漬けにするのが主流。宙釣り全般に使える。

作り方動画は
こちら↓



「魚信」



レンジで作れるタピオカ系のくわせエサ。重さと粘りがあるのでエサ持ちがよく高活性時や段差の底釣りで有効。ポンプ出して使うと好みの大ききで使える。

作り方動画は
こちら↓



ワンポイントアドバイス

ウドンセットの浅ダナ釣り・チョーチン釣り・沖宙釣り、段差の底釣りなど、冬のセット釣りではくわせエサに“ウドン”を使うことが一般的です。このくわせエサを上手く使いこなすことも釣果アップのポイントです。

宙釣りの場合、基本的な考え方はくわせエサの重さを使い分けることです。重さが違えば落下スピードが変わります。この落下スピードの違いをその日のへら鮎の活性とマッチさせることがアタリを多く出す秘訣になります。

一般的には、活性が低いとへら鮎の動きは遅くなります。それだけバラけた粒子へもゆっくり近づきます。このゆっくり近づき動きに合わせるにはゆっくり落下するくわせエサが必要になります。ゆえに軽くくわせエサを選択すればよいのです。活性が高い場合はその逆となります。

段差の底釣りの場合は、底にくわせエサを確実に付けるために重いくわせエサを使うのが一般的です。また、エサのアピール力を高めるため、少し大きめにくわせエサを付

けるといいでしょう。

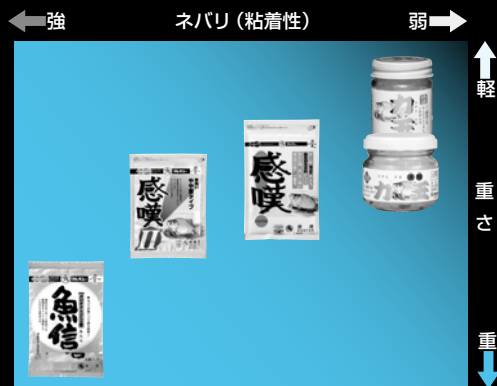
へら鮎の活性に合わせるという面でも、くわせエサの使い分けは必要です。低活性のへら鮎は吸い込む力が弱いのので軽くて小さいくわせエサが効果的。逆に食い気があるときに軽くくわせエサだと遊ばれて（フワフワしてハリスが張らない）しまうこともあります。

このように、くわせエサひとつとっても色々な要素があり、それにハリスの長さやハリの重さが絡むと難しいように感じます。よく分からないときは、色々なくわせエサをとにかく試してみることです。日によってははっきりとアタリ数に差がでます。それぐらいくわせエサの種類が影響するということです。

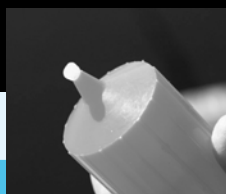
また、くわせエサをローテーションすることで、へら鮎に飽きさせずに興味を持たせるという効果もあります。ちょっとアタリがでないなど感じたときには、くわせエサを変えてみることをオススメします。

ウドン系 くわせエサの 使いこなし

ウドンセットの浅ダナ釣り・チョーチン釣り・沖宙釣り、段差の底釣りなど、冬のセット釣りではくわせエサに“ウドン”を使うことが一般的です。このくわせエサを上手く使いこなすことも釣果アップのポイントです。



「感嘆」や「感嘆II」はオカユポンプに詰めて使う。押し出したとき丸くできるようにするとよい。



「感嘆」10 cc + 水 10 cc ~ 15 cc

蓋付きの軽量カップに水を入れ、そこに粉を入れてシェイクする。または、指でこねるだけですぐに作れるインスタントウドン。水量が多ければ軟らかめ、少なければ硬めに仕上がる。宙釣り全般に使用できる。



「感嘆II」10 cc + 水 10 cc ~ 12 cc

「感嘆」と同じように作れるインスタントウドン。「感嘆」より重さがあるので、活性のあるとき、ハリスを張らせたいときに有効。宙釣り全般だけでなく段差の底釣りでも使える。

冬の管理釣り場の定番釣法

ウドンセットの 浅ダナ釣り

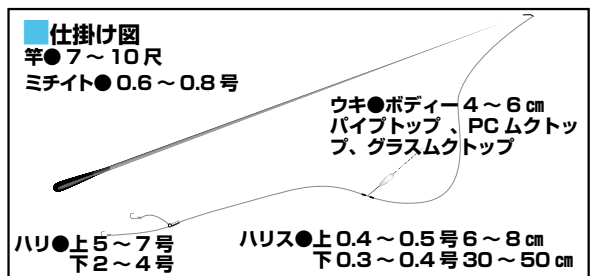
釣り方のコツ

晩秋になると、へら鮎の活性が下がり、ダンゴエサへの反応が悪くなります。近くには寄るもののバラけた粒子を吸うだけでダンゴエサそのものをなかなか食ってはくれません。このバラけた粒子を吸うへら鮎を釣るために、上エサ（バラケエサ）と距離を取った位置にくわせエサがあるセット釣りが有効になります。なかでも回転よく数を釣るのに向いているのが、ウドンセットの浅ダナ釣りです。

この釣り方は大会や例会などでも主流であり、常日頃から攻められているので年々難しくなっています。そこでポイントとなるのが、バラケエサの持たせ方です。よくバラケエサを持たせて釣る、抜いて釣るなどと表

現しています。じつはずっと同じ釣り方で1日釣れ続くわけではわりません。へら鮎の状況は日によっても違いますし、混雑度合い、時間帯でも変化します。ですから、一概に持たせて釣る、抜いて釣ると決めつけることはできないのです。

傾向としては、ある程度活性がある、バラケエサに反応が強い（バラケエサに直接アタつたり食つたりしてくる）ときは持たせ系、厳寒期などでバラケエサへの反応が悪い（エサを持たせていてもウキが動かない）ときは抜き系となります。そして、このバラケエサの持たせ加減でアタリがでたりでなかつたりするのですが、ただ持てば釣れる、抜ければ釣れると



りを難しくしている点でもあります。

ではどうやって釣っていくか？ まずは基本どおり、バラケエサをナジませてへら鮎をタナに集魚して釣っていきま

ワンポイントアドバイス

●エサが持たせられないとき

作った基エサは一番バラける状態です。このエサをそのままエサ付けして持たせられないときは、まずはギュッとエサ付けして圧を強めてみます。それでも持たせられなければ、小分けしたエサの一部を手の甲側で押し練ります。こうするとエアアが抜けてエサがまとまるので持たせやすくなります。ただやりすぎるとエサの開きが無くなるので、少しずつ調整します。



手の甲側を使ってエサを押し練り、エアアを抜く

●アタリがでないとき

サワリがあるのにアタリがでないのは何かしらの理由でへら鮎がくわせエサを吸えない、吸わないということ。まず一番手っ取り早いのがくわせエサの変更です。くわせエサを変えることでアタリがでることはよくありますので、まずはこれを試してみてください。また、アタリがでない理由として、下バリ（くわせエサ）の落下スピードが合っていないことが考えられます。軽くくわせエサにする、ハリを小さく（軽く）する、ハリスを長くするの順で試します。もうひとつ、ハリが軽すぎる、ハリスが長すぎることでフワフワしてアタリにならないパターンもあります。このときはハリを重くする、ハリスを詰めるを試してみましょう。

●サワリがないとき

サワリがないということは、つまり魚が近くにいないということです。ならばエサをたくさん打って寄せるのかといえば違います。洗ければ洗いほど、へら鮎はエサに近づきませんので、エサをたくさん打つのは逆効果です。まずはエサがバラけすぎているのかを確認します。エサを小さくしたり丁寧に付けたりしてバラけ性を抑え、エサに近づいてくるかを確認します。それでもサワリがでないならへら鮎はエサに近づいてこないと判断して下ハリスを伸ばします。それでもサワリがでないときはハリを小さく（軽く）してみましょう。

をナジませて釣れるはず
です。ただし、次第にた
だじつとバラケエサをナ
ジませているだけでは釣
れなくなるでしょう。最
近の傾向として、バラケ
エサを持たせて釣る場合

でも、チリチリとバラける（ゆつくりとウキが上がつてくる）とカラツンが多くなる傾向があります。バラケエサがなじんだらずっとそのままなじんでいるのではなく、ひと呼吸置いてバラケエサが抜けるような釣り方がいいようです。この部分はエサ付けのコントロール（付け方を緩くするなど）やタツチ（水分量で抜け具合を調整。軟らかいほど抜けやすい）で調整します。

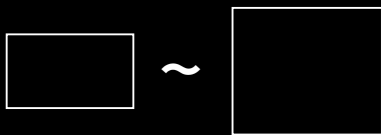
そして抜き系もこの延長で行うとよいでしょう。つまり、ただバラケエサが持たないというよりは、持たせていた状態から少しずつ持たない方

向を探っていきます。この持たせ加減を探る中でアタリがでるパターンを見つければいいのです。持たせと抜きを別々にとらえるのではなく、持たせから抜き方向へ一連の流れで釣れるパターンを見つければいいのでアタリがでるパターンを自分なりに見つけることから始めるといいでしょう。

持たせと抜きを別々にとらえるのではなく、持たせから抜き方向へ一連の流れで釣れるパターンを見つければいいのでアタリがでるパターンを自分なりに見つけることから始めるといいでしょう。

●オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ 10mm
× 17mm~17mm × 20mm





+



+



+



● **エサの大きさ**

実寸大



+



ウドンセットの浅ダナ釣り

一緒に混ぜてまとまりやすい

●バラケブレンド

「粒戦」50 cc+

「粒戦細粒」50 cc+

「セットガン」100 cc+

「セットアップ」100 cc+

水 150 cc

●作り方

「粒戦」50 cc、「粒戦細粒」50 cc、「セットガン」100 cc、「セットアップ」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水150 ccを注ぐ。水が全体にいきわたるようよくかき混ぜる。麩材がしっかり吸水するように5分ほど置いてできあがり。「粒戦」や「粒戦細粒」を先に吸水させる作り方が一般的に知られているが、このようにすべてを一緒に混ぜて作るほうがエサがまとまりやすい仕上がりになる。ボロボロと崩れやすい「粒戦」入りのバラケエサが上手くまとめられない、エサ付けに苦勞するという方は、この一緒に混ぜの作り方を試してほしい。

●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。そのままつまんでエサ付けしてウキにナジミ幅がでるようエサ付け。冬場はエサが乾きやすいので、手水でタッチを維持することを忘れずに！

混雑時の切り札

ウドンセットの 沖宙釣り

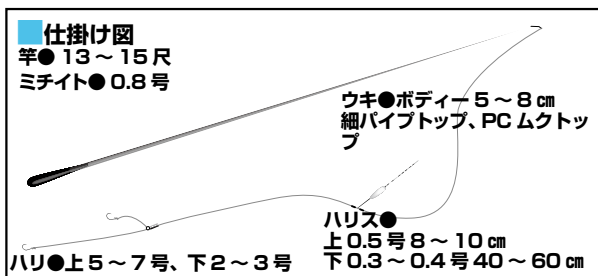
釣り方のコツ

沖宙釣りとは、長めの竿（13～18尺）を使って沖の浅タナ（タナ1～2m）を狙う釣り方です。この沖を狙うメリットはいくつかあります。まず、短竿が並びやすい管理釣り場では、魚の取り合いになります。活性の下がる冬場はへら鮒の寄りも少ないので、同じ長さの竿を並べると、アタリ数にかなり影響がでます。また、沖のエリアは手前に比べて日頃狙われていないため、比較的素直な魚が多くなります。さらには新べらなどの良型も混じる可能性が高く魅力的な釣りです。気むずかしいながらも数が期待できる短竿の釣りに対し、数では劣るかもしれませんが、型のよさ、釣りやすさで上回る沖宙が有効な場面が多いのも事実。

混雑したときなどはより顕著なのでトライしてみる価値は充分あります。

この釣りのポイントをみていくと、まず竿の長さ。これは並びの竿の長さとの兼ね合いで、周りが短竿ばかりなら13尺ぐらいで充分でしょう。しかし、隣が13尺をだしているなら15尺と少しでも長くしたほうが隣の影響を受けずに釣りやすくなります。ただ、季節風が吹きやすい冬場ですので、風向きなども考慮して自分の技量で扱える長さを選ぶというのも選択肢のひとつです。

次に大きめのウキを使うことをすすめます。ウキが大きいということはそれだけオモリを背負いますので、まず振り込みがしやすくなります。そして、この釣りはウキを



少しでも動かして釣るよりは、しっかりタナまでエサを届けて確実に仕留める釣り。狙いのタナまでエサを届けるためにも小ウキではなく大きめのウキを使うのがセオリーです。

そして最後にタナで

ワンポイントアドバイス

●エサが持たせられないとき

この釣りの場合、確実にエサを持たせなければダメなので押し練りを加えて必ず深ナジミさせるようにします。ちょっと持ちすぎかなぐらいでも持たないよりはマシです。持ちすぎと感じたら少しかけエサ付けの圧を緩めてみましょう。それでも持ちすぎたら、基エサを足してバラケ性を復活させます。

●サワリがないとき

この釣りはサワリがでるまで多少時間がかかるのでまずは焦らずにしっかりエサをタナまで届けることです。しばらくエサ打ちしてもサワリがでないときはタナを深くしてみましょう。こちらからへら鮎に近づいていくようにします。また、ハリスを長くする、くわせエサを軽くする、ハリを小さくするなど、ウキの動きを増やす対処法も行ってみましょう。

また、バラケ性を抑えることでへら鮎が近づくとパターンも考えられます。バラケエサを丁寧につける、小さくつけることも試してみてください。

●風が強いとき

長い竿を振る場合、風は大敵です。風向きを考慮して入る場所を決めましょう。基本的に右利きの場合、風につけるほうが竿を振りやすいので、右からの風ならOK。左からの風は振り込みづらくなります。左利きはその逆です。

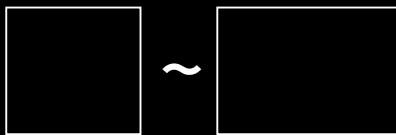
す。活性の下がったへら鮎の動きは鈍いもの。エサを積極的に追いつかせないので、こちらからへら鮎のいる層へ近づけなければなりません。長い竿をだしているメリットとして深いタナも探れま

り込みしやすいため、長い竿が苦手という方は、タナを深く取ることをおすすめします。実際の釣り方は、バラケエサをしつかり付け、ウキを深くナジませてジワジワとバラける間にゆっくりへら鮎が近づいてくわせエサを吸い込むイメージです。決してテンポの早い釣りではなく、確実にアタリがでればヒットするぐらいの感覚です。

思わずに、低活性のへら鮎をじっくり攻めるという意識で充分です。へら鮎が寄るまで時間がかかることもありますので、打ち始めは長めのハリスから入るといいでしょう。長いハリスでよっぽど釣りにくくならない限りハリスは長めのほうが、へら鮎の動きを察知しやすいです。

●オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ 17mm×18mm～
17mm×24mm





+



+



+



+



+



+



ウドンセットの沖宙釣り

大きめのバラケでもエサ付けしやすい

●バラケブレンド

「粒戦」100 cc+

「とろスイミー」50 cc+

「セットガン」100 cc+

水 300 cc+

「セット専用バラケ」200 cc+

「GTS」200 cc+

「セットアップ」200 cc

●作り方

「粒戦」100 cc、「とろスイミー」50 cc、「セットガン」100 ccに水300 ccを注いで吸水のためしばらく放置。そこに「セット専用バラケ」200 cc、「GTS」200 cc、「セットアップ」200 ccを入れてよくかき混ぜる。あとから入れる麩材が多いので掘り起こすようにまぜてムラのない仕上がりにする。

●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。エサ付けの圧調整でしっかりナジませるようにする。持たせられない場合は押し練りを加えて、持たせられる状態にする。

●エサの大きさ

実寸大



ビギナーでも釣りやすい

ウドンセットの チョーチン釣り

釣り方のコツ

ウドンセットのチョーチン釣りは、冬の季節風にも強く、また、穂先の先にウキが位置するので、ウキの動きが見極めやすく、さらに縦サソイなどのロッド操作がしやすいので、ビギナーやセット釣りが苦手という人でも、比較的釣りやすい釣り方です。

セット釣りの基本は、バラケエサをナジませ、そこからバラける粒子にへら鮒が寄ってきて、その粒子に紛れたくわせエサを吸い込む図式。これはチョーチン釣りでも同じ。釣り始めは、この基本に倣った持たせ系のバラケブレンドから始めましょう。ウキのトップ先端までしっかりナジませ、しばらくしてウキが上がってくるぐらいのエサ付けで始めます。これ

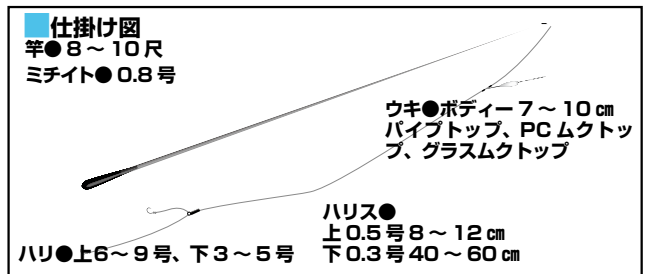
を繰り返すことで次第にサワリがで始め、そしてアタリもでる。これが基本です。

しっかりナジませて釣れるときはバラケエサに興味がある場合なので、タナまでしっかりエサを持たせることを強く意識しましょう。途中でエサが抜けたりすればウワズリにもつながりますので注意しましょう。

しかし、次第に食いが渋くなるとこの釣り方では釣果が伸びません。そこで、ウキをナジませたところから、サオ先を持ち上げるようにしゃくります。あおりの大きさはウキのトップがすべてでるぐらい。このしゃくりでバラケが促進されるのでへら鮒を寄せることになりま

す。しゃくってナジンで

またしゃくる。この繰り返しのなかで、アタリがでるタイミングを探ります。たとえば3回しゃくってアタったとしても、必ず3回はしゃくり、それで当たらない



ワンポイントアドバイス

● サワリがないとき

(持たせ系) 使用しているエサに手水を打ち、ややしっとりタッチにして、「バラケ方の変化で反応するか」を試してください。ここで、一番注意することは、サワリがないからと、バラケエサのサイズを大きくすることで、ウウズリや遠巻きを招くことになります。

(抜き系) エサの開きすぎが原因の場合があります。この場合、小分けにしたエサを練らずに20回かき混ぜ、麩材のネバリをだします。タッチをややしっとりにして、やや開きを抑えたバラケエサにします。

● カラツンが多いとき

(持たせ系) バラケエサの持ちすぎが原因の場合があります。このようなときには、小分けして使用しているエサに基エサを合体させてエサの開きを良くします。次に、下ハリスの長さも調整してください。基本的には3cmずつ短くしていきます。

(抜き系) 魚が落ち着かないで「イトズレ」によるスレやカラツンが要因の場合があります。このような場合は、魚を落ち着かせるために、エサ付けを丁寧(エサの表面をコーティングするよう)にしてください。

● 流れがあるとき

(持たせ系・抜き系) 基本的には流れの上流部、風上にエサを打ち込むようにします。そして、ナジんだ位置がちょうど自分の正面になるようにします。また、仕掛けを繊細にして、水流抵抗を少なくする方法もあります。

● アタリがでないとき

(持たせ系) バラケエサの開きすぎが原因と考えられます。この場合、小分けにしたエサに手水を打って、数回かき混ぜややしっとりネバタッチにすることで、タナに魚が落ちつきくわせエサに反応することがあります。

(抜き系) 持たせパターン同様の対処になりますが、エサの素材が比較的開きやすい物なので、エサ付けを丁寧に、エサ打ちの際、エサの着水をそっとするなど効果的です。

ばエサ切りと割り切って釣りのリズムを作っていきます。また、しゃくりの強弱でバラケ方にも変化がきますので、しゃくる強さも色々お試しください。このしゃくるパターンでは、エサをある程度抱えつつも、ナジミ込みでのアタリも取りやすいPCMクトップがオススメです。

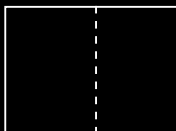
さらに渋くなると、アタリがでるまでのしゃくる回数が多くなります。これは、バラケエサが少ない、あるいは抜けてかまじかアタリがでないの、抜き系の時と判断できます。

抜き系の場合は、しゃくりでもチョーチン釣りの場合は、タナまでの水深がありますので、少しバラケエサを持たせる(1〜2目盛りナジむ)ところからはじめ、徐々に持たせ具合を調整します。1〜2目盛りナジんですぐに抜けるぐらいが理想的です。

釣れるパターンとしては、くわせエサがナジむまでにアタリができれば、くわせエサの落下中のアタリを捉えるため、グラスムクトップのウキが必要になります。

● オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ
17mm×12mm〜17mm×23mm





+



+



+



+



+



ウドンセットのチョコチン釣り

バラケエサへの反応があるときは持たせ系

●バラケブレンド

「粒戦」100 cc+

「とろスイミー」50 cc+

水 150 cc+

「セットアップ」100 cc+

「セット専用バラケ」100 cc+

「BB フラッシュ」100 cc

●作り方

「粒戦」100 cc、「とろスイミー」50 ccを軽く混ぜ合わせるところに水150 ccを注いでかき混ぜて5分放置。そこに「セットアップ」100 cc、「セット専用バラケ」100 cc、「BB フラッシュ」100 ccを入れてよくかき混ぜる。下から掘り起こすように混ぜ合わせ、ムラのない仕上がりにする。

●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。そのままつままでエサ付けしてウキのトップ先端までナジミがでるようにエサ付けの指圧をコントロール。ナジんだところからウキがゆっくりに上がってくるようにする。

●エサの大きさ

実寸大





+



+



+



+



+



ウドンセットのチョコチン釣り

厳寒期の激シブ対応抜き系バラケ

●バラケブレンド

「粒戦」100 cc+

「粒戦細粒」50 cc+

水 150 cc+

「セットアップ」100 cc+

「セット専用バラケ」100 cc+

「バラケマツハ」50 cc

●作り方

「粒戦」100 cc、「粒戦細粒」50 ccを軽く混ぜ合わせるところに水150 ccを注いでかき混ぜて5分放置。そこに「セットアップ」100 cc、「セット専用バラケ」100 cc、「バラケマツハ」50 ccを入れてよくかき混ぜる。下から掘り起こすように混ぜ合わせ、ムラのない仕上がりにする。

●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。抜き系といっても打ち始めは1～2目盛りはナジむようにエサ付けする。ナジんでからすぐ抜けるのが理想で、抜け具合はエサの大きさやタツチ、ハリサイズで調整する。

●エサの大きさ

実寸大



渋い厳寒期に貴重な1枚を釣りあげる

段差の底釣り

釣り方のコツ

1年のなかでもへら鮒の活性が一番落ちる厳寒期。いわゆる年明けの1〜2月はへら鮒の食い気が少ないため高釣果は望めません。この渋い状況下で有効な釣り方が段差の底釣りです。ハリス段差を取ったセツト釣りなので、バランスの底釣りより魚を寄せて釣果をあげるができます。

①この釣りで重要なのは、底にへら鮒を集め、確実にくわせエサを食わせることです。このために抑えるべきポイントが2点あります。

②バラケエサをしつかりナジませる

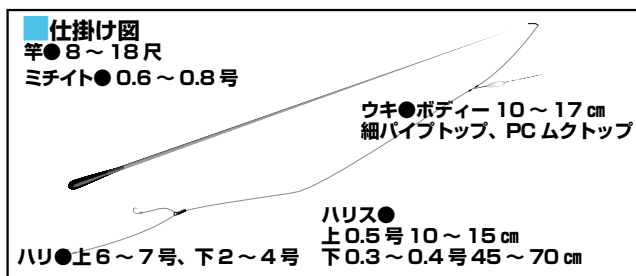
へら鮒を底へ呼び込むにはバラケエサをしつかりナジませなければいけません。ナジまない、ナジミが少ないということ、エサがタナよりも上

でバラけてしまっているということ。これを続けると、活性の低い厳寒期でもウワズリを招いてしまいます。

ウキの動きでいうと、トップ先端までバラケの重さでしつかりナジミ、そこからゆつくりとウキがあがってくる。この動きを丁寧に繰り返すことが重要になってきます。

②くわせエサが底に着いている

バラケエサで寄せたへら鮒が底に溜まったエサを吸い、その際に目の前にあるくわせエサも吸い込みます。あきらかにこのくわせエサを食いにきていることもあります。そのとき、くわせエサを確実に食わせるには、くわせエサが底に着いていなければなりません。なぜなら底からちよつと浮



いた状態より、底に着いた状態のほうが食いやすいからに他なりません。くわせエサを確実に底に付けるためにはタナ取りが重要です。次の手順で正確なタナ取りをしてみましょう。

ワンポイントアドバイス

●エサが持たせられないとき

使っているエサに「段底」を振り掛けてエサ持ちをよくなります。エサ付けもしやすくなるのでエサ付けのコントロールがしやすくなるでしょう。もしこれで持ちすぎようなら「粒戦」と水を1対1で別作りしたものを用意し、これを少し足して調整します。

●サワリがないとき

魚がないのか寄らないのか分かりませんが、まずは魚の気配をキャッチしないことにははじまりません。まずは下ハリスを伸ばして段差を広げます。このときタナは測り直してください。

●アタリがでないとき

まずはくわせエサを変えて目先の変化で反応をみます。日によってアタリがでやすいくわせエサがあるので探ってみましょう。また、バラケエサが開きすぎている可能性もあるので、そのときはエサを手水でかき混ぜてエサの開きを抑えてみましょう。

●流れがあるとき

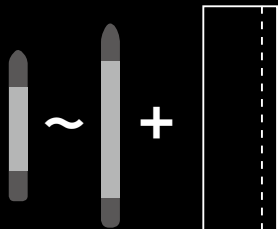
冬は風流れがでやすい季節。下バリだけが底に着く段差の底釣りは流されやすい釣りです。せつかく底にエサをためてもそこから肝心のくわせエサが離れてしまつては意味がありません。流れがついているときは、くわせエサを元の位置に戻す置き直しを駆使しましょう。

①ミチイトに目印となるトンボを付ける。
②下バリにタナ取りゴムを付け、水深を測る
このときにフロートを使用すると大きめのタナ取りゴムが使えるので、ウキの真下が計りやすくなります。フロートがない場合はタナ取りゴムを小さくして使います。いずれの場合も、ウキがストンと早く入り底に着くようだとタナ取りゴムが重すぎます。タナ取りゴムが重いと、ウキが引つ張られて斜め(沖寄り)に水深を測ることになってしまい、本来の水深より深くなつてしまいます。

このタナを測る際は、竿先を持ちあげてタナ取りゴムを手前に寄せてウキの立つ位置の真下にくるよう調整もしてください。
③タナを決める
タナを測って基準となる水深を決めるときは、ウキのトップ先端1目盛りが水面にでるようにします。そして、トンボの位置をトップ先端1目盛りの位置に合わせます。このトンボの位置が水深の目安となります。そしてこのトンボの位置にエサ落ち目盛りを合わせるようウキの位置を上げます。さらにそこから2cm上げたところ(タナを深くした)から釣り始めます。

●オモリ 実寸大

「絡み止めスイッチシンカー」0.8g + 0.25mm厚板オモリ 8mm × 30mm
「絡み止めスイッチシンカー」1.2g + 0.25mm厚板オモリ 10mm × 30mm



ら下バリが離れているので、タナを深くしましょう。また、釣っていかなくでカラツンが多いようであれば、何かしらの理由で下バリが底から離れていると考えられますので、さらにウキを上げて(2cmずつ) タナを深くしていきましょう。



+



+



+



+



+



段差の底釣り

しっかりナジんでゆっくり抜ける

●バラケブレンド

「粒戦」100 cc+

「とろスイミー」50 cc+

「セットガン」100 cc+

水 200 cc+

「セット専用バラケ」100 cc+

「段底」200 cc

●作り方

「粒戦」100 cc、「とろスイミー」50 cc、「セットガン」100 ccを軽く混ぜ合わせたところに水 200 ccを注いでかき混ぜて10分放置。そこに「セット専用バラケ」100 cc、「段底」200 ccを入れてよくかき混ぜる。下から掘り起こすように混ぜ合わせ、ムラのない仕上がりにする。

●使い方

できあがったエサの半分ほどを別のボウルに小分けして使う。そのままつまんでエサ付けしてトップ先端までナジミがでるようにエサ付けの指圧をコントロール。ナジんだところからウキがゆっくり上がってくればOK。

●エサの大きさ

実寸大



新べら攻略には欠かせない

両グルテンの 沖宙釣り

釣り方のコツ

早いところでは10月中旬から始まる新べら放流。養魚場で育てられたへら鮒を放流することで成り立っているへら鮒釣りには欠かせないイベントです。

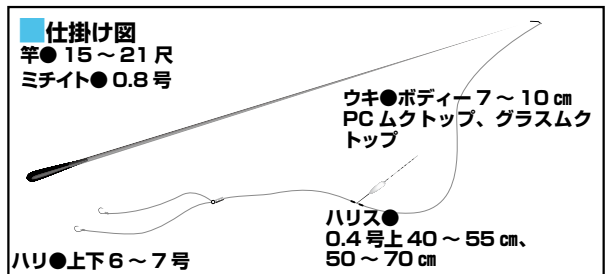
新しく池に放たれた新べらは、既存の魚とは違い魚体がきれいでも中身も詰まっているので重量感もある。さらにその引き味も独特で走るような動きをするのでこれが面白い。だから新べらと聞くとワクワクしてしまうのが釣り人の性なのです。

そして新べら釣りといえはグルテンエサが主役となりますが、新べらが選り好んでグルテンを食っているわけではありません。放流直後であれば腹を空かせている状態なので、どんなエサでも追いかけます。それでも

グルテンが主役になる理由があるのです。

放流から数日も経てば新べらは落ち着き始め、居心地のいいところへ集まります。大まかな流れでいうと、最初は浅いエリア、そして少しずつ深場に落ち、最後に底にづく感じですが。新べらを狙うには、この大まかな流れを知っている必要があります。新べらがいないところではいくら頑張っても新べらは釣れないものなのです。運よく新べらが溜まるエリアを見つけたとしましょう。ここでグルテンエサの出番です。なぜ、グルテンエサなのかといえは、集魚力が少ないことがメリットになるからです。つまり、ダンゴやバラケエサを打ってしまうと旧べらも寄ってしまい、新べら

の率が下がるといいうわけです。くわえて、水温が下がりエサを活発に追う時期ではないので、軽さでアピールでき吸い込みやすいグルテンエサの特徴が新べら釣りにベストマッチするからなのです。



ワンポイントアドバイス

● サワリがないとき

新べらがいるかいないかに左右されますが、ハリスを伸ばす、タナを探ることでサワリがでるところを見つけましょう。季節を追うごとに新べらが深場に行くことが多くなります。水深のある池では2・5～3m、あるいは底近くに溜まることもあります。また水深の浅い池では、早い段階で底につくこともありますので、そういった可能性があるなら、下バリだけ底に付けてみる、あるいは底釣りに釣り方を変更しましょう。

● グルテンエサの取り扱い

グルテンエサは乾きやすいエサです。乾燥しやすい冬場は特に注意が必要で、知らぬ間に表面が固まっていたなんてこともよく起きます。ですので、蓋付きのグルテンボウルを使うか、グルテンボウルを2個重ねるようにし、使う分だけを外にだして基エサは外気に触れさせない。グルテンエサは手直しがしにくいエサですので、こういう配慮も必要です。

釣りのポイントとしては、ウキはPCムクかグラスムクのトップを装

す。新べらは沖に着きやすいという傾向もあります。ですから、沖打ち（宙でも底でも）でエサはグルテンというのが新べら釣りのセオリーとなるのです。釣りのポイントとして一番は場所選びです。先ほども触れたように、まずは新べらが居着く場所（池によって傾向もある）に釣り座を構えることです。そして警戒心のある新べらは沖に着きやすいという傾向もあります。ですから、沖打ち（宙でも底でも）でエサはグルテンというのが新べら釣りのセオリーとなるのです。

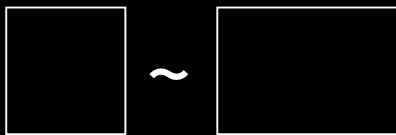
着したものを使います。これはエサの落下中（ウキが立ってからナジミ切るまで）に食いアタリがでるのですが、ハリスが張り切つてない（エサがぶら下がっていない）状態では、アタリの伝達が弱いので、ウキのトップにでる動きが小さくなります。動きを大きく表現してくれるムクトップを使うことで、小さいアタリでもアタリと認識してアワせることができます。

また、新べら特有のアタリとして、ムツと抑えるような動きやムズツと動くようなものも食いアタリである場合があります。ですから、

こういう動きにも積極的に手をだしてみてください。そのうちにこれも食っているんだとアタリの見極めができるようになるでしょう。また竿の長さは長めがいい傾向です。混雑すれば池規定一杯の長竿になります。空いている時などでは15尺ぐらいでも楽しめますので、状況を見て選択してください。

● オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ 17mm×16mm～
17mm×24mm





+



+



+



エサが持たないときは.....

「グルテン四季」100 cc+
「凄グル」50 cc+
水 150 cc

両グルテンの沖宙釣り

落ち込みでもタナでもアタる新べら狙い

●ブレンド

「グルテン四季」100 cc+
「凄グル」50 cc+
「浅ダナー本」50 cc+
水 150 cc

●エサの大きさ

実寸大



●作り方

「グルテン四季」100 cc、「凄グル」50 cc、「浅ダナー本」50 ccをボウルに入れて混ぜ合わせる。そこに水150 ccを注いでムラにならないようによくかき混ぜる。固まりだしたらひっくり返してそのまま使う。

●使い方

できあがったエサをそのままつまみ、指で丸めてエサ付け。できるだけ作ったままのエサを使いたいが、エサが持たないときは押し練りを加える。それでもエサが持たない場合は、「浅ダナー本」を抜いたブレンドにする。

冬を楽しむ定番釣法

バランスの底釣り

(両グルテン & グルテンセット)

釣り方のコツ

宙層のへら鮒の活性が落ち着く秋以降から翌春ぐらいまでがベストシーズンとなる底釣り。特に秋の新べら放流シーズンは、放流後しばらくして底につく新べらを狙えるので面白さは倍増されます。日ごとに水温が下がる季節ですので、グルテンエサがメインとなります。新べらが溜まっていて寄せる必要が少なくときは両グルテン、へら鮒の寄りが少ないときはグルテンセットとなるのが基本です。

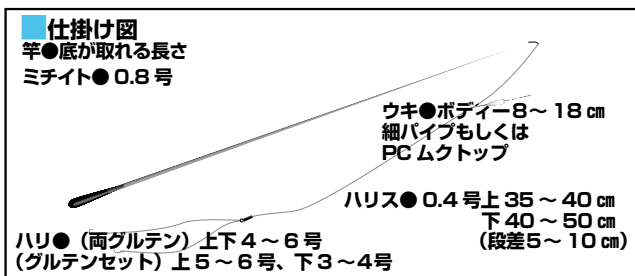
実釣においては、タナとエサ、そしてアタリの取り方の3点がポイントになります。

まずタナですが、これは釣りを始める前にタナ取りを確実にこなうことです。タナの取り方には色々な方法があります

が、タナ取りに自信がない、苦手という方は、ウキにフロートを付けて重さのあるタナ取りゴムで水深を測る方法をおすすめします。そして、確実にエサが底へ着くようにするため、基準となる水深にエサ落ち目盛りを合わせる上バリトントンのタナから3cmほどズラした(深くした)タナ設定からスタートすることをおすすめします。

実際にエサを付けて振り込んだ際、グルテンセットなら3〜4目盛り、両グルテンなら2〜3目盛りのナジミ幅がでるぐらいが基準です。これより深くナジんだ場合はさらにタナを深くし、逆にナジまない(エサは持つていることが条件)場合は浅くします。続いてエサですが、大

きさとタッチを探ります。まずはしつかりナジミがでるまで押し練りを加えていきます。そこからアタリがでる大きさとタッチを探していきます。とくにグルテンエサは、膨らみまますので極端



ワンポイントアドバイス

● サワリがないとき

エサの開きをよくしてみましょう。まずはエサ付けをラフ付けにして魚の反応を引きだすようにします。角張らせてエサ付けするとエサが開くようになりサワリができるようになります。それでもサワリがでないときは、手水を指先から数滴たらしで軟らかくします。そして、指先でグルテンを数回揉み「軟らかくて持つグルテン」に変えます。しっとりタッチで膨らむのでへら鮎が反応しやすくなるでしょう。

● カラツンが多いとき

カラツンが多いときは、タナが合ってなくエサが底で安定していない場合が考えられるのでウキ下を深くしてはわせ幅を多くとります。またエサが硬い可能性もあるのでエサのタッチを軟らかくしたり、大きすぎる可能性もあるのでひと回り小さくエサ付けをして魚が食べやすい大きさにしましょう。

● アタリがでないとき

グルテンエサの場合、一番注意するのが「エサ持ち」です。サワリがでているのに決めアタリがでないときは「エサを数回揉む」ことで、ハリ抜けを防ぐことができます。また、反対にエサが硬すぎ、サイズが大きいと食い込めない場合があります。硬いグルテンエサの場合は「小さく」ハリ付けてください。

に大きなエサはNGです。また、グルテンは持ちがよいと思っっている方も多いとは思いますが、グルテン繊維の少ないタイプなどは意外とエサは持たないことが多いです。硬さで持たせて釣れるときはいいですが、硬いエサではカラツンなどが多い場合はエサを軟らかくしていく必要があります。最後にアタリの取り方ですが、一番確実なのは、ナジんだウキが上がって

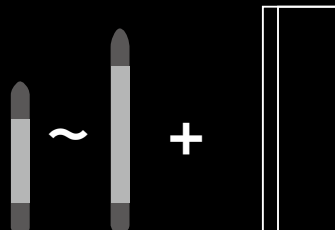
きてエサ落ち目盛りがでてからのカチツとした小さく強いアタリです。このアタリが基本になります。ただ、このアタリだけをねらっていると、待ち気味の釣りになりリズムが悪くなることもあります。少しでも早いタイミングでアタリをだすようにするには、エサを小さく、軟らかくします。ただし、エサの調整をしたときでもナジミ幅は同じようにしてください。ナジミが少なくなるようではエサが持つていないことになりません。

この3点の対応に加えて、ちよつとしたタツクルセッティングの調整をすれば底釣り

は釣れます。ウキの動きが多すぎて複雑になるときはハリスを短く。逆に動きが少ないときはハリスを長くします。また、食いアタリがでにくいときはハリを小さくしてみてください。渋いときほど小さいハリが有効になります。

● オモリ 実寸大

「絡み止めスイッチシンカー」0.8g + 0.25mm厚板オモリ 8mm × 30mm ~ 「絡み止めスイッチシンカー」1.2g + 0.25mm厚板オモリ 10mm × 30mm





+



+



丁寧付け

●エサの大きさ

実寸大



ラフ付け

●エサの大きさ

実寸大



魚が多く寄っているときは丁寧付け。打ち始めや寄り不足を感じたらラフ付けと状況によってバリエーションを持たせよう。寄せ効果の少ないグルテンだけにエサ付けの工夫は重要。上バリはラフ付け、下バリは丁寧付けというセット風もありだ。

バランスの底釣り

新べら狙いの両グルテン

●エサブレンド

「グルテン四季」50 cc＋
「凄グル」50 cc＋
水 100 cc

●作り方

「グルテン四季」50 cc、「凄グル」50 cc、をボウルに入れて混ぜ合わせる。そこに水 100 ccを注いでムラにならないようによくかき混ぜる。固まりだしたらひっくり返してそのまま使う。



エサを混ぜるときは、親指人差し指、中指の3本を使う。グルテンはよく混ぜることが上手に作るコツ。



粉の部分が残っている混ぜ方はNG。



底部はしつとり、表面はボツになるので、固まったらひっくり返して使う。

●使い方

できあがったエサを半分ほど小分けして使う。そのままつまんで指で丸めてエサ付け。これでナジミ幅（目安は2～3目盛り）がでないようなら押し練りを加える。

●くわせブレンド

「凄グル」80 cc+
「グルテン α21」20 cc+
水 100 cc



+



+



●作り方

「凄グル」80 cc、「グルテン α21」20 ccを軽く混ぜ合わせたところに水 100 ccを注いでよくかき混ぜる。しばらく放置してエサが固まったらひっくり返して使う。

●使い方

できあがったエサを3分の1ほどに小分けして使う。そのままつまんで指で丸めてエサ付け。硬めの仕上がりなのでエサ持ちは抜群。大きさやタッチを工夫してみよう。

●エサの大きさ

実寸大



バランスの底釣り

春先まで有効なグルテンセット

●パラケブレンド

「ダンゴの底釣り冬」100 cc+
「BB フラッシュ」100 cc+
水 100 cc



+



+



●作り方

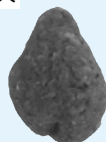
「ダンゴの底釣り冬」100 cc、「BB フラッシュ」100 ccを軽く混ぜ合わせたところに水 100 ccを注いでよくかき混ぜる。しばらく放置してエサが締まってきたら出来上がり。

●使い方

できあがったエサを3分の1ほどに小分けして使う。そのままつまんで指で丸めてエサ付け。これでナジミ幅（目安は3～4目盛り）がでないようなら押し練りを加える。

●エサの大きさ

実寸大



早春の野釣り攻略

グルテンセットの チョーチン釣り

釣り方のコツ

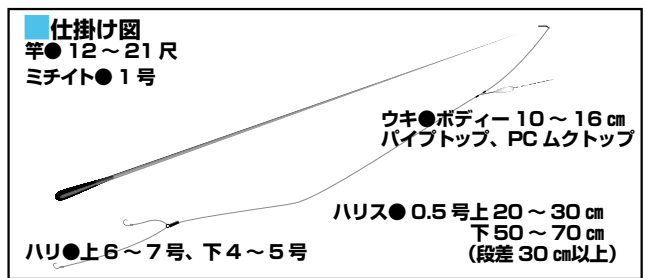
グルテンセットのチョーチン釣りは、新べら放流時期や春先、特に野釣り場（山上湖や準山上湖）で有効な釣り方です。放流直後で新べらが溜まっているような場合は、両グルテンでの数釣りのほうが釣れますが、放流からしばらく経過した頃、また、放流後の口を使わなかった新べらが春先になって食いが立つことがあります、そういうときこそ、この釣り方の出番です。

釣り方の基本はバラケエサをしつかりナジませてへら鮒を寄せ、くわせエサのグルテンを食わせることです。ですから、バラケエサがナジまない、ナジんでもすぐ抜けてしまふのはNGです。ウドンセットとは違い、グルテンセットの場合はバラケエサが付いているときにアタらせるようにするのが基本です。抜けた直後にアタるパターンはありますが、バラケエサが抜けて待つことはありません。

そして、魚が寄ってきたとしてもしつかりナジませる意識は同じです。魚が寄ることでナジミが浅くなり、ときにはこれで早いタイミンダのアタリで釣れることもあります。だからといってそればかりを狙っているのは釣りが崩れてしまいます。

また、魚が多く寄る状況では、高い位置から止めが入りくわせのグルテンの倒れ込みで釣れ続くこともあります。好時合のときは、魚に任せとどんどん釣っていきませんが、ちよつとでもおかしいな、うまく釣れなく

なったなと感じたときは、基本のしつかりナジませることを心がけてください。基本を忠実に守りながら、ときに自然とエサがあまくなったことで早いアタリもでるぐらいなイメージで釣ってい



ワンポイントアドバイス

● サワリがないとき

狙っているタナに魚の量が少ないのでサワリができません。そこで、今まで以上にバラケエサをタナに届けるようにします。バラケエサに手水を打ち、落下途中のバラケ性を抑えます。そして少しでもいいのでウキを深く入れるようにして、タナに魚を寄せるようにします。

また、ハリスの段差を広げることで反応を増やすことができます。スタートは55 cmと70 cmで始め、反応が悪いときは50 cmと70 cmにして上バりを詰めて段差を広げます。

また、くわせエサのグルテンも同様になりました。持つことが重要になります。グルテン量が多くエ

サ持ちのよい「グルテン a 21」が最適。このグルテンは軽さもあるので、くわせエサとしての性能を十二分に発揮してくれます。

また、くわせエサのグルテンも同様になりました。持つことが重要になります。グルテン量が多くエ

サ持ちのよい「グルテン a 21」が最適。このグルテンは軽さもあるので、くわせエサとしての性能を十二分に発揮してくれます。

● アタリがでないとき

セット釣りでは、くわせエサが確実に付いていることが前提になります。グルテンエサに手水を打って、押し練りを加えてエサ持ちを良くしてください。

● カラツンが多いとき

セット釣りは2つの異なるエサが付いているので、どちらのエサにカラツンがでているのかを見極めることが難しくなります。基本的にはエサの持ちすぎが大きな要因なので、バラケエサのナジミ幅を「少なく」する。くわせエサのグルテンを「軟らかくする」「小さくする」などの対処法があります。

● 流れがあるとき

タナまで早くエサを入れるために、ワンランク大きいウキにスイッチしましょう。

この釣りは、山上湖や準山上湖など、水深のある野釣り場で行なうことが多い釣りですので、おのずと深いタナをねらう場面が増えます。そのため、深いタナまでしっかりエサを持たせるには、当然、エサ持ち重視のブレンドになります。

バラケエサは両ダンゴでも使えるようなブレンドです。ベースには「カルネバ」を使いエサ持ちを強調。エサの芯を作りながら適度なバラケ性を持つ「コウテン」をブレンドし、最後にバラケ性をだすために「スーパーダンゴ」を絡めてボソ感をだします。

へら鮒の反応が悪いときは、バラケエサをしめていくことで魚との距離を詰めていきます。また、ハリスの段差を広げることも効果的です。

セッティングのポイントにはエサをしっかり抱えてくれるパイプトップを使うことで確実にタナで釣るよう意識します。

セッティングのポイントにはエサをしっかり抱えてくれるパイプトップを使うことで確実にタナで釣るよう意識します。

サの釣りと同じような感覚で釣っていく釣り方ということが見えてきます。グルテンセットのチョーチン釣りは、同じセット釣りでもウドン釣りということを認識しておきましょう。

● オモリ 実寸大

「絡み止めスイッチンカー」
0.8 ~ 1.6 g + 0.25 mm厚板オモリ
17 mm × 27 mm



●作り方

「カルネバ」400 cc、「コウテン」200 ccを軽く混ぜ合わせたところに水200 ccを注いでかき混ぜる。そこへ「スーパーダンゴ」200 ccを入れてよく混ぜる。少しボソッ気のある仕上がりになる。

●使い方

できあがったエサを半分に小分けして使う。ウキが深ナジミしてしばらく堪えるぐらいに押し練りして調整。

●くわせブレンド

「グルテン α21」40 cc + 水 50 cc



●エサの大きさ

実寸大



●作り方

「グルテン α21」40 ccに水50 ccを注いでよくかき混ぜる。しばらく放置してエサが固まったらひっくり返して使う。

グルテンセットのチョーチン釣り バラケを持たせてアタらせよう！

●バラケブレンド

「カルネバ」400 cc+
「コウテン」200 cc+
水 200 cc+
「スーパーダンゴ」200 cc



+



+



+





●セットガン 370g(チャック袋)



●セット専用バラケ 400g(チャック袋)

ア。プローチに合わせた ふたつのベース。

水温が下がるにつれ、選択する機会が増えてくるセット釣り。
シーズン序盤は視覚へのアピール度が高い粗めの粒を含んだタイプ、
そして厳寒期はタナで漂う微細な粒子を中心としたタイプと、
魚の活性に合わせてバラケエサのアプローチも変わってきます。
そこで欠かせないのが「セットガン」と「セット専用バラケ」。
粗い粒系の前者、微粒子系の後者と
高実績を誇るふたつのベースエサがセット釣りをサポートします。